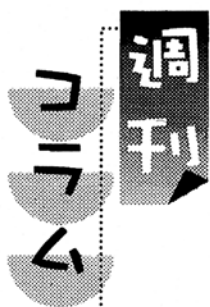


今年注目されるキーワードの一つは「プロフェッショナル」になるのではないかと、思っている。プロフェッショナルな仕事というと専門性の高い職業が思い浮かぶが、あらゆる業種でプロの心意気や技が光る場面がある。

伝統工芸品の箱根細工は神奈川が世界に誇る技能で



あり、職人のプロ意識を背景にその歴史を支えてきた。ものづくり大国、日本の観点からプロ意識をとらえれば形ある物への創造力やこだわりの土台にプロ意識があると見ることができ

る。一方で人と向き合うサービス業の分野にも職人かたぎの見せ場はある。また医師、弁護士、教員といった

「先生」と呼ばれる職業が「プロフェッショナル」と結び付けられることも多い。



「プロ」と「アマ」の線引きはどこにあるのか、判定が難しい時代になってきた。ウェブログを省略して生まれた単語「ブログ」は一般化し、誰でもニュースを紹介し、コメントをつける自分の意見を発表することができるようになった。ニュースの発見、分析、報道という過程は本来ジャーナリストが担ってきたものだ。

米国ではブログの主催者である「ブロッガー」の影響力が無視できないほど大きなものとなり、ホワイトハウスのプレスパスを得た人もいる。党大会などの大きなイベントでもブロッガーたちの存在が注目され、政権への批判から既存のメディアに対する監視にまで、そ

「プロ意識」の継承

の意義が広がりつつある。記者やコラムニストがブログを書いているケースもあるが、インターネットの中の匿名性は避けられない。ネットによって多くの

にはプロが持っているはずの「倫理観」がどの範囲にまで及ぶのかという問題が横たわっているような気がする。



情報共有され、政治的な議論が活性化したことは民主主義のプロセスから見れば歓迎すべきことでもある。しかし、プロフェッショナルな仕事に誇りを持っているジャーナリストと比較すれば、ブログの責任の所在はいまいにならざるを得ない。米連邦議会では、ブロッガーにもロビイストと同様の登録と、議会へのリポートを求める法案が議論されている。

プロと同様の環境や形を整え、誰もが似たような仕事をできる社会にはなつた。ノウハウ本を読めば、プロのテクニクは身に付くような錯覚に陥る。しかし「匠の技」はプロとしての「自覚」と「責任」が「誇り」となって、高度な品質を生み、維持されてきた。先人たちの背中を見て、プロの仕事ぶりを習得してきた時代には、その苦悩、試行錯誤のプロセスを

表現の自由を求めるブロッガーたちの声も聞こえてきているが、この議論の背景

目撃することができた。同じ空間を共有することで、技術だけでなく、仕事に対する姿勢を学んだ。



東京純心女子大講師
早大大学院研究員
牧島可憐

「プロ意識」の本質がどこにあるのか今こそ見直し、その精神を継承しなければならぬ。